

東京都民のパーソナルネットワーク V 外国人への排他性とパーソナルネットワーク

1. はじめに
2. 先行研究と分析枠組み
3. データと変数
4. 分 析
5. 考 察

田 辺 俊 介*

要 約

本稿の目的は、外国人への排他性の規定要因として、従来の研究で主流であった本人の社会経済的地位や出身家庭の影響に加え、様々なパーソナルネットワークの効果について考察を行うものである。外国人への排他性の形成にネットワークがもたらす効果として、1. ネットワークが個人の情報環境を構成することにより生じる情報バイアスとしての効果、2. 密度や同質性（異質性）などのネットワークの構造的要因の効果、以上二つの効果を想定し、その分析を試みた。2000年8月に行われた東京都民のパーソナルネットワークに関する調査のデータを用いて分析を行った結果、男性においては個人属性や出身家庭に関わる変数の効果がないのに対してネットワーク構成員の平均教育年数が有意な効果を持ち、その結果から排他性の形成に情報環境としてのネットワークの情報バイアスとしての効果があることが示された。一方、女性に関しては年齢や教育年数などの個人的な属性の効果も強かったが、それとともにネットワークの異性比率や関係の多様性などの変数が有意であり、ネットワークの構造的要因が排他性の形成要因となることが明らかになった。以上の分析結果から、男性においては自分の周囲の人々の意見との同調という側面でのネットワークの効果が見られ、その一方で女性においては様々なネットワークを持つことが寛容性を高めるというネットワークの効果が示された。このような男女間のネットワーク効果の差異に関しては、男女の間でネットワークの基礎的特徴が異なる点が影響したものと考えられる。

1. はじめに

昨今、日本に滞在する外国人が着実に増えてい

る。その中でも特に東京は、外国人登録者数が2000年末で30万人近く、人口に占める割合も2.46%と、ともに全国トップである（法務省入国管理局 2001）。国際化さらにはグローバルゼーション

*東京都立大学大学院社会科学部社会科学研究科社会学専攻（博士課程）

を背景とし、新たに東京に居住・滞在・訪問する外国人は今後も増え続けると考えられる。それに対し、外国人に対する排他的な主張の存在も無視できないものとなりつつある。典型的には石原都知事の「三国人発言」の中の「不法就労外国人が騒擾を起こす」というような見解に、そのような排他的思想が表れていると言えよう。

そのような外国人に対する敵意や排他的態度の形成要因に関する研究の歴史は古く、戦前のボガードス (Bogardus 1925a, b) による人種・民族間の社会的距離の古典的研究にまでさかのぼることができよう。その中でボガードスは特定の人種・民族に対する嫌悪感が、1) 伝統と一般世論の影響、2) 幼少期の個人的経験、3) ある種の感覚的印象としての嫌悪感の例証、4) 成人後に経験した好ましからざる人種・民族的印象などによって形成されると述べている。特に1) 伝統と一般世論の影響としてその個人の持つ談話世界 (universe of discourse) にいる周囲の他者の態度が、個人の社会的距離の形成に重要な影響を与えていると論じ、排他性の形成に対するパーソナルネットワークの影響を指摘している (1925a)。しかしその後の研究としては、個人の社会経済的地位や出身階層を排他性の主要な形成要因とする研究が主流であり (たとえば Adorno et al. 1950)、ボガードスが着目したような周囲の人々、つまりネットワークの影響に関してはあまり考察がなされてこなかった。そこで本稿の目的は、外国人への排他性の規定要因として、従来の研究で主流であった本人の社会経済的地位や出身階層に加え、色々なことを話し合ったり、意見を交換しあったりするネットワーク (ディスカッションネットワーク) の影響について考察を行うものである。

2. 先行研究と分析枠組み

2. 1 先行研究の概括

ボガードスが指摘したような、排他性に対する「周囲の人々の影響」について直接検討した研究はあまりないと言えよう。しかし、他の社会意識

に対するパーソナルネットワークの効果を検証した研究は存在し、まずネットワークを「対人環境」や「情報バイアス」と見なして行われた一連の研究が挙げられよう。たとえばハックフェルトが行った投票行動に関する分析では、ネットワークが個人の意識や態度に与える影響として、ネットワーク成員の態度への同調の効果や一定の方向性を持つ情報バイアスとしての効果を論じている (Huckfeldt 1986)。また日本でも池田が同様の視点から政党支持のネットワーク内での等質性を検証し、それを日常的な会話を取り交わすネットワークが一つの情報環境を構成し、情報バイアスを生み出してネットワーク成員の意識を方向付けた結果であると結論づけている (池田 1997, 2000a)。また同じく「対人環境としてのネットワーク」という枠組みを用いて石黒 (1998) はジェンダー意識に対するネットワークの影響を検討し、周囲が性役割意識に肯定的であると認知している回答者は、自身も性役割意識に肯定的になりやすく、また同時に性役割意識が社会的にも受容されていると思う傾向が強いことを実証データにより明らかにしている。これら諸研究の知見から、ネットワークが持つ情報環境としての性質とその情報バイアスによる意識の等質化の効果、端的に言い換えればネットワークの「同調効果」が想定されよう。そしてそれが外国人への排他性という意識の規定要因の一つとなっていることが考えられる。

次にネットワークの同質性 (異質性) や密度のようなネットワークの構造と、そのネットワークに属する個人の意識の関連に着目して行われた諸研究があげられよう。たとえば事例データを通じて夫婦の持つネットワークと結婚関係に関する規範意識の関連を分析したボットの研究は、夫婦が共通の密度の高いネットワークを持つほど夫婦役割分担意識が強く、対してより密度の低いネットワークを持つほどその夫婦規範もゆるやかであるということを示した (Bott 1971)。その結果に関してボットは、密度の高いネットワークでは夫婦お互いの準拠集団も一定でそのために二人の規範も近似するが、対してネットワークがゆるやかな場合は様々な準拠集団が選べることから

二人の規範が多様になると解釈している。またラウマンは、ある個人の政治的態度に対するネットワークの影響力を検討し、そこから同質なネットワークは異質なネットワークに比べてより純粹で一貫した態度を助長し、維持すること、また密度の高いネットワークの方が個々人の態度に対してより効果的な社会的基準となり、特定の社会的立場の特性に即した態度を「結晶化」させると論じている(Laumann 1973)。それらの研究を受けてビエネンストックらは、「ネットワークの同質性と密度が、各グループ内態度を強化し、グループ間の差異を拡大する」という仮説のもと、社会的・政治的問題、たとえばレイシズムやフェミニズム、言論の自由などの社会意識に対するネットワークの密度と同質性の効果を検討している(Bienstock et al. 1990)。結果、人種的同質性の高く、密度も高い白人ネットワークの人種的保守性が高いことなどが検証され、ネットワークの同質性と密度がグループ間の差異を強めることが明らかになった。またネットワークと外国人への寛容性の関連について検討した伊藤(1997, 2000)の研究においても、ある種のネットワークの構造の効果として、伝統的な規範に意識をからめとる規範的圧力としての親族や近隣のネットワーク、あるいは逆に規範性を脱色していく「磁場のがれ」としての友人ネットワークの効果が検討されていた。分析結果としては友人総数の多い回答者の方が外国人により寛容であり、「広い友人関係を持ち様々な規範的世界に関して知識を有していることが、外国人に対する寛容性を高めている」(伊藤 2000:149)との仮説が提示されている。そのような先行研究を概括した結果、排他性の規定要因としてネットワークの同質性(あるいは異質性)や密度などの構造的な要因も考慮すべきと判断した。

以上のような諸研究を踏まえて本研究では、ネットワークの情報バイアスとしての同調効果や、異質性や密度などの構造的な要因の影響を想定し、外国人への排他性の規定要因として個人的属性や出身階層の影響を統制した上でもネットワークが独自の効果を持つのか否かを考察する。

2. 2 分析枠組み

本節では個人の排他性を規定する要因を検討し、本研究の分析枠組みを提示する。まず量的な社会意識研究として典型的なモデルである本人の属性、年齢や社会経済的地位の影響に関して、本研究では年齢・学歴・職業の効果を想定している。年齢に関しては、戦争などの特定の社会的事象の経験の差の影響や、グローバリゼーションの影響に対する世代差を考えたものである。教育年数の効果としては、教育によって正確な知識を得ることで偏見が弱まり、その結果として外国人への排他性も弱体化するメカニズムや、より直接的な反偏見・反差別教育の効果が想定できる。職業に関しては、職業威信として社会的地位の高低の効果と考えるよりも、職業生活の特性や職業の利害関心による排他性という意識への影響を想定した。たとえばホワイトカラー層に比べてブルーカラー層の方が、低賃金で流入する外国人労働者などに対する危機感を持ち、そのために外国人への排他的な傾向が強くなる可能性が指摘できよう。次に価値形成に対する出身階層の影響を考えた。排他性などの社会意識の形成において、生まれ育った家庭における教育や価値伝達の影響は無視できない効果をもっていると考えられるからである。パーソナリティ論(たとえばAdorno et al. 1950)においては特にこの側面が重視され、出身家庭における教育が権威主義的パーソナリティの主要な形成要因とされている。また吉川(1998)の実証研究においても、権威主義的伝統主義などに対して親の社会的態度が子供に影響しているという知見が得られていることから考慮すべき変数と考えた。

以上のような個人的属性や出身家庭の効果を統制した上で、パーソナルネットワークが外国人への排他性という意識に与える影響について検討していく。まずパーソナルネットワークの意識への影響としては、ハックフェルトや池田らの研究にある「情報環境」あるいは「情報バイアス」としての効果が考えられる。ボガダスの古典的研究(1925a)でも、「人種の嫌悪感」の起源と発達に関して人々が周囲の価値に同調することを通じて

他民族への偏見や排他性を形成すると論じられているように、外国人に対して排他的な人々とのつき合いが多い方が自身もより排他的な傾向を持つことになり、逆に外国人に対して寛容な人々との関係が多ければより寛容になるというメカニズムを想定した。先行研究の知見から類推し（池田1997、2000a）、そのような「情報バイアス」は外国人に対する明示的な会話だけではなく、日常の何気ない会話、たとえば「外国人が増えて物騒になっているねえ」などの会話によっても生じ、結果的に個人の意識を変容させると考える。このようなネットワークの情報バイアスによる意識の等質化の効果を端的にまとめると、ネットワークの価値へのある種の「同調」の効果と考えることができるかと判断し、以下これを「同調モデル」と名付けて分析していく。

また次にネットワークの同質性（あるいは異質性）や密度のような構造の効果を検討していく。同質的で密度の高いネットワークを持つ個人は、そのネットワークの同質的な価値世界を準拠集団とする。それに対し、異質性が高く密度の低いネットワークを持つ人は様々な価値観に触れることで自分の価値を準拠する対象を取捨選択でき、その結果として異質な存在に対する寛容性などが高まるのではないかと考えた。そこから異質性が高く、密度の低いネットワークを持つ人は様々な規範や価値に触れることで、外国人という「異質」な存在に対する寛容性が高まるという仮説が想定できよう。このような効果はラウマン（1973）の「意識の結晶化」やビエネンストックら（1990）の「態度の分極化」の議論から導き出されたものであり、伊藤（1997、2000）の研究において規範意識からの「磁場逃れ」の効果として検討されていたものでもあろう。これらはネットワークの異質性や密度のようなネットワークの構造がもたらす効果であり、そこから以下の分析ではこのモデルと「構造モデル」と呼ぶこととする。

3. データと変数

3. 1 使用データとサンプルについて

本研究で用いるのは2000年8月に行われた東京都民のパーソナルネットワークに関する調査(注(1))のデータである。理論母集団としては東京都に在住する20歳から69歳までの男女であり、層化二段抽出法を用いてサンプルを抽出し、方法としては郵送法を用いて行われたものである（詳しくは森岡・星（2001）を参照）。

本研究ではそのデータのサンプルを男性と女性に分けて分析する。その理由は、男女の間には属性の量的・質的な違いが存在し、またネットワーク特性も異なり、その結果として排他性の形成メカニズムが男女によって異なる可能性が考えられるからである。たとえば属性としては教育年数の平均値・分散、あるいは職種などが男女間で異なり、同時にその変数の効果の質も異なると予想できる。また両親の教育の効果が男女別様に働くことも考えられる。加えて所持するネットワークの構造や性質が男女で異なることが指摘できる。実際今回の調査のデータでも、女性の方が男性よりも親族がネットワークに含まれる率が高く、またネットワークの平均職業威信スコアも低いなど、ネットワークの特性に男女差が存在する（中尾2001）。そのようにネットワークの特性が異なることから、男女の間でネットワークの持つ意味合いや効果が異なることが想定されるため、男女にサンプルを分けて分析することとした。

3. 2 操作化

(1) 排他性尺度の作成

本研究では以下のような外国人(注(2))への様々な意見を訪ねた8項目の質問文を用いて排他性を測定する(注(3))。

政治的な迫害で難民となった外国人を積極的に受け入れた方が良い。

外国人という理由で大家が入居を断るのは良く

表1 外国人への排他性8項目の単純集計

N=655 (%)	そう思う	どちらか と言えば そう思う	どちらか 言えばそ う思わな	そう思わ ない	無回答
外国人がもたらす新たな思想や文化は好ましい。*	21.2	41.7	22.9	12.1	2.1
外国人による日本の土地購入は良くないことだ。	8.2	19.8	34.8	35.1	2.0
政治的な迫害で難民となった外国人を積極的に受け入れた方が良い。*	15.4	36.2	34.7	11.6	2.1
家族が外国人と結婚するとしたら、そのことに抵抗を感じる。	14.8	27.5	25.6	30.2	1.8
外国人という理由で大家が入居を断るのは良くないことだ。*	37.9	38.0	15.1	7.3	1.7
外国人が多く入って来ると日本経済に悪影響をもたらす。	8.2	20.6	39.1	30.1	2.0
多くの外国人が日本に永住することは良いことだ。*	19.4	39.1	29.2	10.4	2.0
考え方の違う外国人を日本社会に受け入れることはむずかしい。	17.1	39.8	27.8	13.9	1.4

註 *印は外国人へ肯定的な意見であり、「そう思わない」ことが排他性の表明と見なす。

ないことだ。

外国人がもたらす新たな思想や文化は好ましい。多くの外国人が日本に永住することは良いことだ。

外国人による日本の土地購入は良くないことだ。家族が外国人と結婚するとしたら、そのことに抵抗を感じる。

外国人が多く入って来ると日本経済に悪影響をもたらす。

考え方の違う外国人を日本社会に受け入れることはむずかしい。

それら各項目の単純集計の結果は以下(表1)のようになっている。聞き方によってはセンシティブにもなりやすい排他性に関する問いであるが、今回用いた質問に関してはどれも無回答率は低く、とりわけ答えにくいものはなかったと言えよう。また全体として回答に特に偏りはなく、一定の弁別力がある項目群となっている。個別に回答の傾向を見ていくと、「外国人という理由で大家が入居を断るのは良くないことだ」「外国人による日本の土地購入は良くないことだ」「外国人が多く入って来ると日本経済に悪影響をもたらす」という項目で外国人に排他的な感情を示す人が2割台と他に比べて若干少ない。これらは主に外国人との経済的関係に対する項目であり、そのような側面に対する排他性は「貿易立国」たる日本ではそ

れほど強くないことを示していよう。対して、「考え方の違う外国人を日本社会に受け入れることはむずかしい」という項目は5割以上の人が排他的な態度を示しており、社会的に外国人を受け入れることへの抵抗感の根強さを示す結果である。

次にそれらの8項目のそれぞれに対する相関関係をみていった。まず相関係数を出す前に変数の方向を揃えるため、外国人に肯定的な意見の場合「そう思う」から順に0~3、否定的な意見の場合は「そう思う」から順に3から0までの値を割り当てた。そのように方向を整えた後に相関をみた結果、それぞれの項目間の相関は全て1%水準で有意であり、互いに十分な相関関係が見られた(表2)。この結果からこれらの項目が何らかの共通した要素を持つことが推定でき、外国人への排他性という共通概念を測定した項目群と見なせると判断した。

次にそれらの項目に対して因子分析を行った。その結果、固有値3.23、寄与率40.4%という因子が一つ抽出された(表3)。

それぞれの項目の因子負荷量を見ていくと、「大家が入居を断ること」という項目の因子負荷量が0.464と若干低いのが、それ以外の項目は0.60以上と概して高いことから、それらが排他性を測定した項目群であると考えて問題ないと考えた(表4)。

表2 外国人への排他性8項目の単相関

上段N、 下段相関係数	新思想・ 新文化	土地購入	政治難民	家族との 結婚	大家入 居断る	経済的 悪影響	永住	受け入れ 難しい
新思想・新文化	—	638	636	638	639	638	637	640
土地購入	0.283	—	638	639	639	640	639	641
政治難民受け入れ	0.395	0.257	—	638	639	638	638	640
家族との結婚	0.298	0.392	0.293	—	642	640	640	643
大家が入居断る	0.263	0.200	0.277	0.202	—	641	641	644
経済的悪影響	0.280	0.378	0.278	0.371	0.203	—	639	642
多くの外国人永住	0.421	0.363	0.393	0.286	0.273	0.421	—	642
受け入れ困難	0.335	0.325	0.213	0.335	0.125	0.391	0.388	—

註 相関係数は全て1%水準で有意

表3 排他性の因子分析の結果 (N=627)

因子	固有値	説明力	累積説明力
1	3.23	40.4	40.4
2	0.97	12.1	52.4
3	0.79	9.9	62.4
4	0.72	9.0	71.3
5	0.65	8.2	79.5
6	0.62	7.8	87.3
7	0.53	6.6	93.9
8	0.49	6.1	100.0

表4 因子負荷量と共通性

	因子負荷量	共通性
新思想・新文化	0.662	0.438
土地購入	0.639	0.409
政治難民受け入れ	0.610	0.372
家族との結婚	0.633	0.400
大家が入居断る	0.464	0.216
経済的悪影響	0.682	0.466
多くの外国人永住	0.721	0.520
受け入れ困難	0.638	0.408

以上のように8つの項目間に共通する排他性が抽出され、この因子から回帰法を用いて因子得点を算出し、それを排他性尺度として用いることとした。

(2) 説明変数の操作化

本研究では説明変数に個人属性と出身階層、それにネットワーク諸変数を用いる。まず個人属性に関しては、年齢・学歴、それに職業を用いる(注(4))。年齢はそのまま実数値を用いたが、学歴は連続変数として処理するためにカテゴリカルに聞いた項目を年数に変換し、教育年数として用いている。また職業に関しては、ホワイトカラー上層(専門職・管理職)をレファレンス・グループとし、ホワイト下層(事務職・販売職)、ブルーカラーその他(生産工程・労務、サービス職、保安職、農林漁業従事者)、無職層(主婦、学生を含む)の3つのダミー変数として投入する。

次に出身家庭の影響であるが、本研究で用いるデータには両親の価値観や教育方針などを直接聞いたデータはない。そこで、そのような側面をできる限り代表する指標として、両親の教育年数の平均を用いることとした。排他性のような意識に対しては、親の職業的地位などによる家庭の社会的地位よりも、より抽象的な価値伝達の効果が重要と考え、それをある程度代表するのが教育年数と考えたからである(注(5))。父親と母親のそれぞれの教育年数を投入することも考慮したが、二つの変数の間に非常に高い相関(0.75)が存在し、多重共線性を考慮して両者の平均を用いることとした。

最後ネットワーク変数であるが、まず周囲の人々の価値への同調の効果を考えるためには、どんな人々の排他性が高いのかを推定する必要がある。本研究で用いるデータには池田(2000a)や石黒

(1998)が行っていたような回答者に自分のネットワークメンバーの意識について推論してもらった変数はないため(注(6))、様々な属性と排他性の間の関係を検討して排他的傾向の高い人を推定することとする。そこで3.1で作成した排他性尺度と年齢・教育年数の単相関をみていくと、年齢と教育年数ともに1%水準で有意に相関しているとの結果が出た(表5)。つまり若年層よりも高齢層が、教育年数の長い人よりも短い人の方が、排他性が高いということである。

表5 排他性尺度と年齢と教育年数の相関

	相関係数	N
年齢	0.239 **	627
教育年数	-0.192 **	627

注 **は1%水準で有意

上のような結果を受けて、「情報バイアス」としてのネットワークの同調効果を検証するこの「同調モデル」の操作仮説は、「より平均年齢が高く、平均教育年数が短いネットワークを持つ人の方が排他的な傾向が強い」というものである。

次にネットワークの密度や異質性の排他性への影響を検証するために用いるネットワーク変数を考えていく。密度に関してはマースデン(1987)の方法に則って、ネットワークメンバー相互の認知と親密度から合成変数として作成した。異質性に関しては様々な指標が考えられるが、まずピエネンストックら(1990)が用いた学歴と性別を用いる。学歴に関しては年数に換算して標準偏差を算出した。性別に関しては本人との異質性という点を考えてネットワーク内の異性の比率を投入した。また年齢によっても外国人の排他性が異なることから、年齢の多様性も考慮すべきと考えて年齢の標準偏差も考慮する。それらに加え、ネットワークの異質性の指標としてネットワークを構成するメンバーとの関係の多様性を用いることとした。異質性というものが多元的な規範世界への接触をもたらし、それが排他性を低減とするならば、ネットワーク成員との関係が多様か否かは重要な指標となると考えたからである。操作化と

しては、ネットワークに挙げた人との関係性を、親族、会社の人、学校やサークルの人、近隣の4種類に分け、回答者の持つネットワークがどれだけの種類にわたっているかを変数とした。以上のような操作化の結果、このネットワークの異質性や密度が排他性に影響を与える「構造モデル」の操作仮説は、「ネットワークメンバーの年齢と教育年数の標準偏差が大きく、異性比率の高く、より多彩な関係性で結ばれたネットワークを持つ人の方が、そうでない人に比べて排他性が低い」というものである。

またネットワークの基礎的な性質を統制するため、分析にさいしてはネットワークに挙げた人数と回答者のネットワークメンバーに対する主観的な親密度、それに既婚か否かを統制変数として用いる。ネットワークに上がった人数が違えば、その平均値や標準偏差の意味合いも異なるためであり、またネットワーク成員への親密度もその個人にとってのネットワークの基礎的な意味づけであり、その差を統制すべきと考えたからである。また既婚か否かに関しては、既婚者のネットワークの基本的性質が、特に女性において未婚者と大きく異なるからである。また既婚男性においてもネットワークに配偶者が挙げることが多く、そのような既婚・未婚での差を統制するためである。操作化としては、主観的な親しさは回答者が親しいと思うメンバー数をネットワークに挙げた人数で割った比率として、また既婚か否かは既婚者を1とし、未婚と離死別者を0としたダミー変数として用いることとする。

4. 分析

4.1 男性サンプルにおける分析結果

3.1で作成した排他性尺度を従属変数として、3.2で検討した操作化説に基づき、「同調モデル」と「構造効果モデル」、それぞれについての重回帰分析を行った(表6)。

まず男性の個人属性に関しては特に有意な変数がなく、ネットワーク変数など他の変数を統制し

表6 外国人への排他性を従属変数とした男性におけるモデル

	β	
	同調モデル	構造モデル
年齢	.088	.148
教育年数	.064	-.088
ホワイトカラー下層	.013	.024
ブルーカラー	-.002	-.032
無職	-.037	.031
両親の教育年数	.003	-.009
婚姻状態	.011	.036
挙げられた人数	-.099	-.070
親密度	-.115 #	-.155 *
平均年齢	.012	
平均教育年数	-.163 #	
密度		-.116
年齢の標準偏差		-.128
教育年数の標準偏差		.028
異性比率		-.031
関係の多様性		-.082
F値	1.724 #	1.583 #
R自乗値	.074	.097
ケース数	248	221

註 *は5%水準で、#は10%水準で有意

た結果、男性の排他性というものが個人の属性によってほとんど決定されていないことが示された。次に出身階層の影響であるが、それも有意ではなく、男性にとって出身階層というものも排他性の形成に直接的な影響を与えていないと推定できる。

一方ネットワーク変数に関しては、「同調モデル」において、ネットワークの平均教育年数が10%水準で有意であり、標準偏回帰係数-.163という負の効果、またネットワークメンバーに対する親密度が10%水準で有意であり、標準偏回帰係数-.115の負の効果を持っていた。これはネットワークメンバーの平均教育年数が高い人ほど、またネットワークメンバーと主観的に親密と考える人が多い人ほど、外国人への排他性が低いということを示す結果である。個人的な属性や出身家庭の影響があまりみられない中、ネットワークの平均教育年数や親密度が有意であったというこの結果は、男性の排他性の形成において個人的な属性よりも

むしろ周囲の人々の影響が強いことを示している。一方、構造モデルでは主観的な親密度のみが5%水準で有意であった($\beta = -.155$)。この結果に関しては、同じネットワークの効果としても、その密度や異質性などの構造的要因の効果があまり男性においては顕著ではないことを示す結果である。またネットワーク成員との主観的な親密度が有意であり、これは親密な人間関係の中にいる人の方が外国人に対する排他的な傾向が弱いことを示しており、日常の人間関係それ自体の意識に与える影響がみうけられる。

以上のような分析から、男性において排他性は個人属性や出身家庭よりも、むしろネットワークの影響、とりわけ情報環境としてのネットワークの影響を受けて形成されていると考えられよう。

4. 2 女性における分析結果

次に女性における規定要因の考察を行うために、男性同様に両モデルについての重回帰分析を行った(表7)。

女性の同調モデルでは年齢、教育年数、それにブルーカラー従事が5%水準で有意であった。それぞれの標準偏回帰係数は、年齢は.228、教育年数が-.165、ブルーカラー従事が.135と個人属性と排他性の間に比較的強い関連が見られる。これは女性の場合、高齢で、教育年数が短く、かつ(上層ホワイトカラー層に比べて)ブルーカラーに従事する人ほど、排他性が高いということの意味する結果である。なぜ男性においては効果を持たなかった年齢や教育年数の効果が女性においては存在するのかに関しては解釈が難しいが、ブルーカラーの効果に関してはその多くがパート労働者であり、外国人労働者が流入し、安い賃金で働くようになることが直接的な利害にかかわってくるものが影響していると思われる。しかし同調モデルにおいてはネットワーク変数で特に有意なものはない。一方構造モデルでは、同調モデルと同じく個人属性の影響も強いが、異性比率が5%水準、関係の多様性が10%水準で有意であり、ネットワークの効果も有意である。これは女性においては、より多様なネットワークに属する人の

表7 外国人への排他性を従属変数とした女性におけるモデル

	β	
	同調モデル	構造モデル
年齢	0.228 *	0.183 **
教育年数	-0.165 *	-0.219 **
ホワイトカラー下層	0.051	0.040
ブルーカラー	0.135 *	0.124 #
無職	0.089	0.071
両親の教育年数	0.058	0.019
婚姻状態	-0.034	0.024
挙げられた人数	0.014	-0.025
親密度	-0.050	-0.055
平均年齢	-0.008	
平均教育年数	-0.111	
密度		-0.005
年齢の標準偏差		-0.011
教育年数の標準偏差		-0.098
異性比率		-0.115 *
関係の多様性		-0.110 #
F値	5.460 **	5.458 **
R自乗値	0.163	0.209
ケース数	321	304

註 **は1%水準、*は5%水準、#は10%水準で有意

方が、そうでない人に比べて排他性が低いということを示す結果である。より多彩な人との交際や、あるいは男性という女性にとっては異質な存在との交際が様々な価値観に触れる機会となり、その結果排他的傾向が弱まったと解釈できよう。つまり、より多様なネットワークとの交際が排他性を弱める効果を持つ可能性がこの結果から示されたと思われる。

4. 3 男女の規定要因比較～モデルの比較～

以上のように男女それぞれの排他性の規定要因についての検討を行ったが、次にモデルごとに効果を比較することから、排他性の形成要因についてのさらなる考察を行う(表6・7参照)。

まず個人属性に関して男性はどの変数も有意ではなかったのに対し、女性は年齢、教育年数、それに職業が有意な効果をもっており、このように個人的属性の効果は男女によって大きく異なった。この個人的属性の効果の差が、男性のモデルのR

自乗値が同調モデルで0.074、構造モデルで0.097と低いのに対し、女性のモデルではそれぞれ0.163、0.209と高くなることにつながったと思われる。しかし、両性において両親の教育年数は直接の効果を持たないことから、出身家庭は直接的に排他性の形成に大きな効果を持つわけではないと考えられる。

ネットワーク変数に関しては、男性では親密度と平均教育年数が有意であり、どちらかと言えば同調モデルを支持するような結果である。対して女性は異性比率や関係の多様性が有意であり、構造モデルの方が適格的である。これに関しては、男性のネットワークが自身の教育程度に大きく左右され、高学歴者は高学歴者同士のネットワーク、低学歴者は低学歴者同士のネットワークを構成しやすく、その分学歴の同調効果が高まったものと考えられる。一方女性はそのネットワークの基本的特徴として親族比率の高いことが指摘でき(注(7))、そこから逆に多様なネットワークを持つ女性はそうでない親族中心のネットワークの人に比べ、様々な規範世界に属することで排他的傾向が弱まったのではないかと考えられる。このように男女においてネットワークの効果の差異は、男女の持つネットワークの基本的性格の違いが反映されているとも考えられよう。またそこから逆に、ネットワークの特性によってネットワークの意識に対する効果に差があることが推測され、ネットワークの持つ多様な影響力が示されたと思われる。

5. 考察

本研究では外国人への排他性という社会意識の形成に対して、個人的属性や出身階層の効果とともに、ディスカッション・ネットワークの持つ効果を検討することを目的として男女別に分析を行った。その分析結果をまとめると、以下のような知見が得られた。

1. 男性における排他性の形成要因としては個人的属性や出身階層の影響は弱かった。ネットワークの効果としても、ネットワーク平均教育年数に

負の効果があり、このように男性の排他性の形成に関しては、ネットワークが一つの情報環境を作り出して情報バイアスを構成し、その結果としてネットワークメンバーの意識への同調効果が存在することが考えられる。

2. 女性における排他性の形成要因としては年齢や教育年数のような個人属性の効果が高い。またネットワークの効果としては異性比率や関係の多様性が有意な効果を持っていた。それらネットワークの効果に関しては、同調効果よりも、より多様な人々との関係を持つことで多様な価値観に触れ、その結果排他的な傾向が弱まるというメカニズムが想定できる。

3. 男性と女性の排他性の規定要因の比較を行うと、男性では個人的属性や出身階層の影響はほとんど見られないが、対して女性の場合にはその影響が強いことが顕著な差異として発見された。またネットワークの効果に関しては、男性の排他性の形成には同調効果が見うけられる一方、女性の場合にはネットワークの異質性が高いほどより寛容になると考えられる。このようなネットワークの効果の差異は男女のネットワークの基本的な性質の違いが影響していると考えられよう。また同時にネットワークの多様な効果が示された結果である。

以上のような本研究の分析の結果、外国人への排他性という社会意識の形成に対してパーソナルネットワークが何らかの影響を与えることが確認された。しかし課題も数多く残されている。まず分析結果の解釈として、同調効果に関しては、ネットワークを構成することで意識を共有したのではなく、もともと意識を共有するからこそネットワークを構成するのだ、という同質性による選別の可能性も否定できない点を考える。また本研究ではあくまでネットワークメンバーの排他性を属性から推測しており、その点からも解釈には一定の留保が必要となることは否めない。

そのような変数の操作化に関していくつかの問

題点が存在しており、その点を補うようなデータを収集することも課題の一つであろう。特にネットワーク項目においてはネットワークに挙がった人々の排他性を単相関で関係のあった項目から推定しているが、それらの操作化はあくまで「推定」であり、実際とのズレが生じる可能性があることは否めないのである。実際にネットワーク成員の排他性のデータまで得るためには、スノーボール・サンプリングなどの手法を用いてデータを収集する調査が必要になるであろう。

また分析モデルをより精緻化する方向が考えられる。男女のネットワークの効果の違いがそのネットワークの基礎的な特性の違いに由来するのであれば、どのような性質の違いによってその効果の差異がもたらされるのか、あるいはどのような特性のネットワークにおいて同調効果、あるいは構造の効果が高いのかなどの検討が必要となろう。ネットワークがその多様な特質によって異なる機能を持つ可能性は、今後の研究において着目すべき点と考える。加えて本稿で検討したモデル自体に関しても、より親密度の高いネットワークの方が情報バイアスとしての効果が強く、結果同調効果が強いのではないかと仮説から、そのような交互作用を取り入れたモデルが考えられ、より精緻な分析が必要である。以上のような課題のさらなる検討から、ネットワークの及ぼす排他性、ひいては社会意識一般への影響の解明が求められていよう。

注

- 1) 本調査は、『年賀状による拡大パーソナルネットワークの研究』（平成11年度～平成12年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究代表者：森岡清志）の一環として実施された。
- 2) ここで「外国人」とあえて特定の民族名を冠する質問としなかった理由は、ある民族名を出すことのある種のステレオタイプを助長することにもなりかねないことに加え、社会意識としてより抽象的な「外国人」というものに対する意識を考察の対象としたかったからでもある。しかし、回答者が想定する外国人像をある程度統制するために、「ここ10年、在日外国人の数が急激に増加している

と言われますが」という文言を質問文に付け加えている。

- 3) 外国人への排他性について、先行研究（伊藤1997, 2000）ではボガードスの社会的距離尺度を応用した変数によって測定されていたが、ボガードスの社会的距離尺度は外国人への排他性という概念を接触レベルごとの抵抗感で測定している。しかし、より一般的な外国人との経済的・社会的関係に対する意識も排他性という概念を構成する重要な要素と考え、排他性の測定にこのような多様な質問文を用いた。
- 4) 社会経済的地位を表す変数の中に個人収入や世帯収入は含めなかった。その理由としては、どちらの変数もその個人の社会経済的地位を代表するのかの判断が難しく、また個人の社会意識の形成に対する効果が明確ではないと考えたからである。
- 5) また排他性尺度と単相関において、職業威信よりも教育年数の相関の方が強かったことも考慮している。
- 6) かりに回答者に訪ねていたとしても、先行研究で取り扱っていた支持政党（池田2000a）や性別意識（石黒1998）よりも、外国人への排他性は答えにくく、かつ他者のそれを認知するのが困難であり、正確なデータが得にくいことも事実である。
- 7) ネットワークメンバーに挙がった人のうち親族の占める比率は、男性の平均29%に対して女性は39%にもものぼる。詳しくは中尾（2001）を参照。

参 考 文 献

- 池田謙一『転換する政治のリアリティ：投票行動の認知社会心理学』木鐸社, 1997.
- 池田謙一「ネットワークの中のリアリティ、そして投票」、鮑戸弘編『ソーシャル・ネットワークと投票行動』, 木鐸社, p.19-45, 2000a.
- 池田謙一『コミュニケーション：社会科学の理論とモデル5』東京大学出版会, 2000b.
- 石黒格「対人環境としてのソーシャル・ネットワークが性別に関する態度と意見分布の認知に与える影響」, 『社会心理学研究第13巻第2号』p.112-121, 1998.
- 伊藤泰郎「社会的ネットワークと異質への寛容性」, 『都市度とパーソナルネットワークに関する研究』平成6-8年度科研費報告書（基盤研究(A)-(1)）, p.113-124, 1997.
- 伊藤泰郎「社会意識とパーソナルネットワーク」, 『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会, p.141-159, 2000.
- 吉川徹『階層・教育と社会意識の形成』ミネルヴァ書房, 1998.
- 城戸浩太郎・杉政孝「社会意識の構造－東京都における社会的成層と社会意識の調査研究, (三)」, 『社会学評論』第四巻, 1・2合併号, p.74-100, 1954.
- 関根政美『エスニシティの政治社会学－民族紛争の制度化のために』名古屋大学出版, 1994.
- 田辺俊介「外国人への排他性とネットワーク」, 森岡清志『年賀状による拡大パーソナルネットワークの研究』平成11年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書, 東京都立大学人文学部, p.89-102, 2001.
- 中尾啓子「東京都民のパーソナル・ネットワーク～その概要と特性～」, 森岡清志『年賀状による拡大パーソナルネットワークの研究』平成11年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書, 東京都立大学人文学部, p.13-30, 2001.
- 法務省入国管理局『平成12年末現在における外国人登録者統計について』
(<http://www.moj.go.jp/PRESS/010613-1/010613-1.html>), 2001.
- 森岡清志・星敦士「研究目的と調査概要」, 森岡清志『年賀状による拡大パーソナルネットワークの研究』平成11年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書, 東京都立大学人文学部, p.3-12, 2001.
- Adorno, T. W. et al., *The Authoritarian personality*, Harper&Row, 1950(田中義久ほか訳『権威主義的パーソナリティ』青木書店, 1980).
- Allport, G.W. 1961, *The Nature of Prejudice*, Addison-Wesley (原谷達夫・野村昭訳『偏見の心理上・下』培風館 1965).
- Bettelheim, B. and Janowitz, M., *Social Change and Prejudice*, Free Press, 1964 (高坂健次訳『社会変動と偏見』新曜社, 1986).
- Bienenstock, E. J., Bonacich, P., Oliver, M., "The Effect of Network Density and Homogeneity on Attitude Polarization", *Social Networks* 12, pp.153-172, 1990.
- Bogardus, E. S., "Social Distance and Its Origin", *Journal of Applied Sociology*, January-February, pp.216-226, 1925a.
- Bogardus, E. S., "Measuring Social Distance", *Journal of Applied Sociology*, March-April, pp.299-308, 1925b
- Bott, Elizabeth, *Family and Social Network; Roles, Norms and External Relationship in Ordinary Urban Families*, Free Press, 1971.

Brown, Rupert, *Prejudice: Its Social Psychology*, Blackwell, 1995 (橋口捷久・黒川正流編訳『偏見の社会心理』北大路書房, 1999).

Huckfeldt, R., *Politics in context: Assimilation and conflict in urban social life*, Agathon Press, 1986.

Laumann, Edward O., *Bonds of Pluralism: The form and Substance of Urban Social Networks*, Wiley-Interscience, 1973.

Marsden, Peter V., "Core Discussion Networks of Americans", *American Sociological Review*, 52, pp.122-131, 1987.

Key Words (キー・ワード)

Personal Networks (パーソナルネットワーク), Attitude towards Foreigners (排他性), Informational Bias (情報バイアス), Heterogeneity (異質性), Density (密度)

Tokyo Residents' Personal Networks
V Effects of Personal Networks on Attitude towards Foreigners

Shunsuke Tanabe*

*Graduate Student, Tokyo Metropolitan University
Comprehensive Urban Studies, No.76, 2001, pp.83-95

The aim of this paper is to examine the effects of individual's personal network on his/her attitude towards foreigners. Prior research has focused on the individuals' own socioeconomic status and the family background as contributing factors in forming a positive or negative attitude towards accepting foreigners in one's own society. This paper focuses on one's personal network as a factor and empirically examines such effects, based on the perspective that one's personal network has an effect on one's social consciousness. Data came from a social network survey of Tokyo residents and the samples of males and females were separately analyzed.

Hypotheses were tested regarding the effects of one's own socioeconomic status, parent's education, characteristics of those in network (average age and educational level), and the structure of network (density and heterogeneity). It was found that determinants of attitude towards foreigners are different between males and females. For males, the educational level of those in one's network was a significant factor, while respondent's own attributes were not. For females, on the other hand, one's own attributes such as age and years of education were found significant as well as the heterogeneity of the network. Implications of such results are discussed.